

Twinkle No.11 2017.12.01

川崎こどもクリニック附属病児保育室リトルスター <http://www.kawasaki-kc.jp/littlestar.html>

〒597-0102 貝塚市木積 607-10 TEL/FAX 072-446-0415 little-star@kawasaki-kc.jp

くすりの話⑤ 咳の薬（その2）

前号の鎮咳薬、去痰薬に続き、今回は気管支拡張薬について考えてみます。

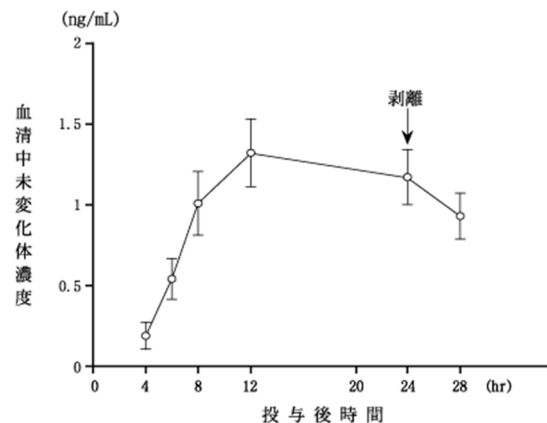
【気管支拡張薬】

気管支壁の中には平滑筋があり、呼吸の効率を良くする作用を担っています。その平滑筋の異常収縮を緩めて、気管支を広げるのが気管支拡張薬です。β刺激薬やテオフィリンなどが含まれます。小児では喘息などで投与される薬であり、本当は咳の薬に分類しない方が良いでしょう。

テオフィリンは10年ほど前まではよく使われましたが、けいれんを誘発しやすいということが嫌われ、最近はほとんど使われません。

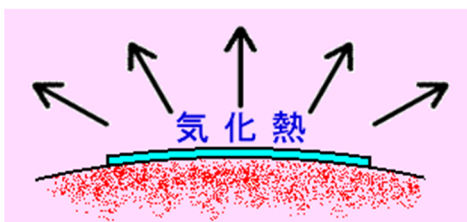
β刺激薬の代表的な薬がメブチン®であり、吸入や内服で使用します。他にも吸入ではベネトリン®などもあります。ホクナリン®についてはもともと内服の薬でした（今もあります）が、テープの形の剤形も作られ、今やこちらが主力となってい

ます。よく「咳止めのシールの薬」として処方されている場合がありますが、あくまで気管支拡張薬であり決して咳止めではありません。また、貼った後に有効成分は皮膚に吸収されてさらに下のグラフのように血中に入って気管に到達し、気管支拡張作用を示します。「咳が止まらなかったら貼りましょう」といってすぐに咳が止まるのであれば、気分のせいというような面が強そうです。



貼付型冷却剤を考える

この時期定番の道具として貼付型冷却剤（熱さまシート、冷えピタなど）があります。なぜあんなものでひんやりとするのでしょうか。その秘密はシートの中に含まれている水分にあります。この水分が蒸発するときに奪う気化熱が解熱効果をもたらすのです。ただし、おでこに貼っている限り頭



が冷やされ気分が良くなる効果はありますが、全身の解熱

に関しての効果は乏しい（実際の体温変化を調べた論文もあります）です。そんなこともあり、貼付型冷却剤を脇に貼っている方もおられます。しか

し、残念ながらこれはほとんど意味をなさないことが多いです。先に書きましたように水分が盛んに蒸発することによって解熱効果が出るのですから、上から服を着ていては蒸発せず効果がないというわけです。結論として脇や太ももの付け根を冷やすのであれば、氷などを使わねばなりません。アイスノンなどの保冷剤を利用しても良いでしょう。いずれにしても、これらを使用する場合はそれぞれの特性を理解して利用したいものです。

なお、「脇を冷やす」とは、脇から腕の内側を流れていく動脈を冷やすという意味です。脇の下ということで、脇のあばら骨の上を冷やしているのは全く意味なしで、むしろ腕章のような形のもので上腕の内側を冷やすべきです。